

組織目標評価報告書（平成28年度）

部局名：

附属図書館

部局長名：

沖 陽子

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	自己評価
①-1 目標	①-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>学内関係機関や検討WGと連携して、平成28年度からのアカデミックライティング授業へのサポートが可能となるように平成28年度中にライティングサポート体制の充実を図るとともに、異世代・多文化・異文化交流の活性化を図るためにセミナー等を充実させる。また、学修環境のグローバル化を図るためサイン等の多言語化に着手する。さらに学修意欲の喚起のための学術展示に着手する。</p>	<p>アカデミックライティングへのサポートのため「レポートの作法入門」「レポートのテーマ設定選びから執筆まで」等の「レポート書き方講座シリーズ」の小冊子を作成し、学生及び検討WGにて配布した。非常に利用は高く現在までに累計1,704部配布した。また、平成27年度実施したライティングサポート(試行)について附属図書館報「楷」増刊号で、検証結果を報告するとともにレポート作成のための「良いレポート・論文を書くための情報探索講座」等の講習会等を春秋に開催しアカデミックライティングへのサポートを充実させた。「知好楽セミナー」を実施し、旧制高校卒業者や実業家、学芸員等多彩な社会人との交流を活性化した。</p> <p>図書館内の案内板を日英併記にするなどグローバル化への対応も進めていった。学生の学修意欲を喚起するため、本学の学術成果のポスター展示を7回、企画展示を8回本館2階サルトフロrestaにて開催した。</p>
	①-2 大学全体への貢献
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	①-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
知好楽セミナー(4回以上)・ライティングサポートセミナー(6回以上)の実施回数	知好楽セミナー(5回 155名参加)ライティングサポートセミナー(10回 51名参加)
②研究領域	自己評価
②-1 目標	
<ul style="list-style-type: none"> ・研究水準及び研究成果等について ・研究実施体制等の整備について ・国際共同による研究の状況について ・女性・外国人研究者の受入状況について ・外国研究機関における研究従事状況について ・その他 	
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
③-1 目標	③-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>貴重資料を利用した公開講座や展示会を開催し、資料の公開を拡大する。また、図書館内におけるギャラリー機能を利用したミニ展示等地域を意識した情報発信を行う。</p> <p>大学の研究成果を広く発信する「学術成果リポジトリ」のコンテンツを拡充するとともに積極的な情報発信を行う。</p>	<p>平成28年8月に公開講座「キビ・イズモ・ヤマト」を開催した。池田家文庫の絵図展「江戸と岡山藩」を11月に岡山市シテイミュージアムとの共催で開催した。館内において県内他機関との連携を含む企画展を8回開催した。</p> <p>学術成果リポジトリについては学内紀要を始めとして博士論文等を中心に着実に公開論文数を増加させている。</p>
	③-2 大学全体への貢献
③-2 目標とする(重要視する)客観的指標	③-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
リポジトリコンテンツ数、公開講座(50人以上)や展示会の参加(入場)者(1,500人以上)数	平成28年度リポジトリコンテンツ登録数 723論文(2月末現在)(昨年度新規登録693論文)、公開講座:参加者99名(定員70名) 池田家文庫絵図展:来場者2,320名(前年比+380名)

④センター業務	自己評価
④-1 目標	④-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>全学委員会や選定WG等を主導的に開催し、平成29年度分電子ジャーナルについて着実に契約を実行すると共に全面的に見直し作業に着手し、本学の研究の基盤を支えていく。また、一部の電子ジャーナルについて受益者負担の考え方を取り入れたサービスの本格運用を行う。</p>	<p>平成28年5月に平成29年度分の経費を確保し、電子ジャーナル選定ワーキングを7回開催し、平成29年度の電子ジャーナル等について契約タイトルを確定し、順次契約を履行した。その際、購読タイトルの減少を補うためにアグリゲータ系と言われる電子ジャーナル群の導入を決定した。また、平成30年度以降の電子ジャーナルについて全面的に見直しの検討を行った。</p> <p>平成27年度に導入した前払い型Pay per Viewについて利用論文毎に利用者が一定の負担する方式を年度当初から導入した。</p>
④-2 目標とする(重要視する)客観的指標	④-2 大学全体への貢献
<p>主要電子ジャーナルのアクセス数</p>	<p>④-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</p> <p>Elsevier社 293,849論文ダウンロード、Wiley社 129,942論文ダウンロード、Springer社 78,336論文ダウンロード (いずれも平成28年1～12月の利用数)</p>
【総括記述欄】	
<p>部局経費削減の影響は大きく、平成28年度は学生用資料費の大幅減となった。また、現在以上のサービス拡充は経費の面からも厳しいが、現状のサービス水準の維持を前提にさらなる自主学修の場としての環境を整備していきたいと考えている。</p>	